

## 平成 28 年度スモン患者検診における血液・尿検査

鷲見 幸彦 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 副院長室)  
新畑 豊 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 脳機能診療部)  
武田 章敬 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 脳機能診療部)  
堀部賢太郎 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 脳機能診療部)  
山岡 朗子 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 脳機能診療部)  
辻本 昌史 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 脳機能診療部)  
中野 真禎 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 脳機能診療部)  
河合多喜子 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 脳機能診療部)

### 研究要旨

愛知県スモン検診受診者に対し、現在の健康状態や合併症の発見など患者の健康管理に有用な情報を得ることを目的として血液・尿検査を試行した。

対象は平成 28 年度愛知県スモン患者集団検診を受診した 11 名 (男性 1 名、女性 10 名)。年齢は 50 歳から 88 歳 (平均 75.4 歳)。対象地区は三河地区 (豊橋市、豊川市、蒲郡市、岡崎市)。10 名は検診会場で 1 名は自宅で採血を行った。血液検査 (血算、電解質、肝機能、腎機能、脂質、血糖、HbA1c)、尿検査 (定性) を 11 名全員に実施した。本年度は別研究の遺伝子用採血を同時に採血したため採血量を増やさないよう骨粗鬆症検査は行わなかった。平成 28 年度の結果は正常 2 名、軽微な異常 4 名、軽度の異常 5 名で、中等度の異常および高度の異常の受診者はいなかった。医師の経過観察が必要と考えられる受診者の全体に対する比率は 45% であった。10 名が平成 26 年度に受診しており経過を観察できたため前回との比較を行った。個々の患者の経年的変化では改善が 1 名、不変が 8 名、一段階の悪化が 1 名であった。

### A. 研究目的

愛知県スモン検診受診者に対し、現在の健康状態や合併症の発見など患者の健康管理に有用な情報を得ることを目的として血液・尿検査を試行した。

性) を 11 名全員に実施した。本年度は別研究の遺伝子用採血を同時に採血したため採血量を増やさないよう骨粗鬆症検査は行わなかった。内容は表 1 に示す。

### B. 方法

対象は平成 28 年度愛知県スモン患者集団検診を受診した 11 名 (男性 1 名、女性 10 名)。年齢は 50 歳から 88 歳 (平均 75.4 歳)。対象地区は三河地区 (豊橋市、豊川市、蒲郡市、岡崎市)。10 名は検診会場で 1 名は自宅で採血を行った。血液検査 (血算、電解質、肝機能、腎機能、脂質、血糖、HbA1c)、尿検査 (定

表 1

血算：白血球数、赤血球数、ヘモグロビン、 ヘマトクリット、血小板数
電解質：Na、K、Cl
肝機能：AST (GOT)、ALT (GPT)、ALP、LDH、ChE、 総蛋白、アルブミン、総ビリルビン、アミラーゼ
腎機能：尿素窒素、クレアチニン、尿酸
脂質：総コレステロール、中性脂肪、血糖、HbA1c

### C. 研究結果

平成 28 年度の結果は正常 2 名、軽微な異常 4 名、軽度の異常 5 名で、中等度の異常および高度の異常の受診者はいなかった。医師の経過観察が必要と考えられる受診者の全体に対する比率は 45%であった。10 名が平成 26 年度に受診しており経過を観察できたため前回との比較を行った<sup>1)</sup>。(図 1)。軽度異常の原因は、HbA1c 上昇 2 名、貧血 2 名、尿酸値の上昇 2 名、総コレステロール値の上昇 2 名、AST、ALT 上昇 1 名であった(重複あり)。個々の患者の経年的変化では改善が 1 名、不変が 8 名、一段階の悪化が 1 名、であった。1999 年から 17 年間の経過を追えた例は 7 例あり、経過中中等度の異常を呈した例(AST、ALT 上昇、総コレステロール値の上昇、HbA1c 上昇)は 2 例であったが 2016 年度には全例軽度以下に改善していた(表 2)。

### D. 考察

受診患者の減少と高齢化している患者の状況からより頻回な検診を行うために、平成 25 年度から尾張地区と名古屋地区を合同で検診を行っている。三河地区では検診地域が変わらないため、尾張・名古屋地区に

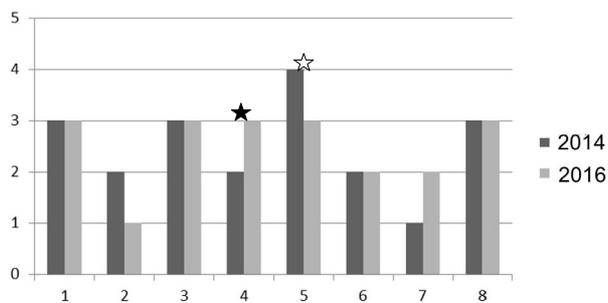


図 1 個々の検診者の経年的重症度変化  
X 軸は検診者番号 Y 軸は重症度評価  
黒は 2014 年、グレーは 2016 年 星は改善、 星は悪化

表 2 1999 年から 17 年間継続して検診に参加できた 7 例の重症度変化

	1999	2002	2005	2008	2011	2014	2016
case1	3	3	4	4	4	3	3
case2	1	1	1	1	1	2	1
case3	1	2	3	3	3	3	3
case4	2	1	3	3	3	1	1
case5	3	3	1	1	1	4	3
case6	3	3	1	1	1	2	2
case7	1	1	2	2	2	1	2

比べ、参加者数はこれまでと変わらず、比較的少ない。また 1999 年以来毎回継続して検診を受けている患者が 7 名おり、それに対して初めて検診に参加された方が 1 名みられた。医師の経過観察が必要と考えられる軽度異常から高度異常の全体に対する比率は 45%と低く、今年度は初めて中等度以上の患者がいなかった。長期間検診をうけている患者は経過中、中等度程度の異常をきたすことはあっても改善していた。一方 2014 年検診で 5 の評価を受けた受診者は本年度は検診を受けることができていなかった。軽症者のみが受診できている可能性を示している。

### E. 結論

1. 愛知県三河地区のスモン患者を対象とした検診を行い血液・尿検査の異常について検討した。何らかの経過観察が必要と考えられる受診者の割合は 45%であった。
2. 今回は 2 年前 5 年前に受診しておらず久々の受診となった例が 1 名あった。7 名は 1999 年から連続 7 回受診していた。
3. この地域の個々の受診者 10 名の経年的変化を 2 年前と同一の患者で比較検討できた。改善は 1 名、悪化している例は 1 名であった。他の 8 名は変化なしであり安定していた。長期経過観察できた患者は安定している。

### I. 文献

- 1) 鷲見幸彦. 平成 26 年度スモン患者集団検診における血液・尿検査. スモンに関する調査研究 平成 26 年度総括・分担研究報告書. 107-109 2014